

意見交換の概要 (平成 24 年 5 月 28 日(月)・松野町コミュニティセンター)

1. 県立南宇和病院の存続について

現在、県立南宇和病院は、常勤の医師が 20 名から 8 名へとかなり減り、子どもに限らず大人でも救急でかかる場合に助かるという保証がない。宇和島まで救急車で搬送しても 20 分以上かかるし、高知県宿毛市の幡多けんみん病院も同じくらい時間がかかる。私には、障害がある 9 歳の娘がいて、無呼吸発作など色々な障害をもっておりとても心配なので、南宇和病院の存続をお願いしたいと思う。

【知事】

ちょっと細かい地域の話になるので、担当からの答えの方が間違いないと思う。私の方が大雑把なことになるのですが、まず、地方のお医者さんの問題は、全国的な課題になっており、実はこれ原因があるんです。何年か前から、10 年くらい前かもうちょっと前かも知りませんが、厚生労働省が、研修医制度というのを大幅に見直したんです。この研修医制度が導入される前までは、わりと比較的満遍なく色々な地域に若いお医者さんをぐるり循環させることができ、地方における医師不足は、そんなに問題になっていなかったんです。ところがこの研修医制度を導入してから、若い先生が、全部大都市の病院に集中するようになりました。今までは、ある程度制限されていたのが、それを取っ払ってしまったんです。そうすると一番設備の整っている、患者さんも多い、色々な病床試験ができる、そういう病院に若いうちは居た方が、後に役に立つということになり、その結果として東京とか大都市にバーツと押さえが利かなくなって集中してしまったんです。地域の方に行く人がいなくなって今日の医師不足に繋がったのが現実です。

このことについては、松山市長時代から国に対して、そもそもこれが発端じゃないかということも申し上げてきたんですが、中央の役人というのは、決してミスは認めません。「いやいやこれは有効な手立てです。医師会からの要望によって実現したんです」という返事しか返って来ません。しかし、何よりもこれが問題だということは分かっています。ですから、これは引き続き、地域における医師不足対策というものについて、もっと国が考えるべき。国会でもそうですが、この現実というのは、本当に地域医療に大変な問題をもたらしています。この前噛み付いたんですが、国の方から「それをカバーするために各地域ごとに奨学資金制度等を作って、奨学金を使う条件として、例えば愛媛県だったら愛媛県の地域である一定の期間働いて欲しいという条件を作って対策が講じられているじゃないか」と言ったんです。「ちょっと待ってくれ」と。「貴方達がやったことによって我々が困って、それをカバーするために地域が財源を使って独自でやっている。貴方達は、何もやってないじゃないか」と。本当にそういうやり取りしかなされていない。医師不足の問題は人の命に繋がりますから、ちょっと答えになっているかどうか分かりませんが、南宇和病院も含めて地域医療の存廃が掛かっているのが医師確保の問題なので、我々も地元の大病院とか色々な先生方に、学部ごとに御願いしながら何とか遣り繰りしてこうなんです。本当はもっと増やしたい。何とかしたいという思いがあるが、来てくれる人がいないというのが現実なので、一人でも多く来ていただくということを今の段階では模索しながら、一方では国に対して、その根本になっている問題点についての変更を求めるといふ、この 2 本立てで取り組んで行きたいと思えます。

2. 特別支援学校の設置について

愛南町の小学校16校のうち9校に支援学級が存在するが、その後、中学校、高校となかなか普通の学校には入れない。せめて宇和特別支援学校の分校という形で、30分くらいで通えるところにできれば良いなと思っている。その辺のご意見を願います。

(企画振興部長)

特別支援学校の高等部門の関係は、今日は、高等学校関係者がいないので持ち帰らせていただいて、その辺りの状況をどう考えているのか確かめて、後ほど返事をさせていただきます。

《後日回答》〔企画振興部長 / 教育委員会〕

特別支援学校を所管する県教育委員会に状況を確認いたしましたところ、「県立宇和特別支援学校は、聴覚障害部門と知的障害部門があり、地元西予市はもとより、宇和島市、大洲市、八幡浜市、愛南町など南予地域の児童生徒約200名が、寄宿舍やスクールバスも利用しながら勉学に励んでおります。

お尋ねのありました宇和特別支援学校の分校の設置につきましては、平成20年度に策定した『県立特別支援学校再編整備計画』に基づき、高等部分教室の設置の可能性を検討しているところですが、同校の児童生徒数に大きな増加が見られないこと、南予地域の小・中学校特別支援学級に在籍する児童生徒数が他の地域に比べて少ないこと並びに厳しい県の財政状況等を考慮すると、当面は、分教室の設置を具体化させることは困難と考えております。しかし、今後も引き続き検討課題として、南予地域の特別支援教育を必要とする児童生徒数の推移等を注視していくこととしておりますので、御理解願います。

また、お子さんの進学に際しては、障害の状態や学習ニーズ、将来の希望などに基づき、本人に最も適した進路が選択されるよう、今後、小学校の担任教諭や特別支援教育コーディネーターと話し合われるものと思いますが、宇和特別支援学校においても、教育相談や地域の特別支援教育に関する情報提供を行っておりますので、どうかお気軽に御相談ください。」とのことでした。

3. デイサービス事業への支援について

愛南町には、小学校まで通える療育センターとして、デイサービス事業のオレンジクラブというのがありますが、中学生以上は扱えない状態。面積がもう少しあれば中学生も対応できるようになるので、地方局にもお願いをしているが、なかなか実現できない状況にある。知事からのお力添えを御願いたい。

(南予健康福祉環境部長)

少し分かりやすくご説明をいただいたらと思います。

(参加者)

デイサービス事業で、詳しい制度は分からないのですが、元々はお母さん方が、障害のある子どもさんを保育・療育できるということで、10年くらい前に立ち上げたものを社会福祉協議会の方で制度化したものです。

(南予健康福祉環境部長)

これは愛南町の方で、そういう学級を運営されているということですか。

(参加者)

学級というよりデイサービス事業です。小さい保育園みたいな一つの教室で、0歳から12歳までを曜日ごとに分けて治療に当たっているということです。宇和島で言えばあけぼの園みたい

なところ です。

(南予健康福祉環境部地域福祉課長)

こども療育園センターがやっているような通所事業のことでしょうか。

(参加者)

愛南町独自の通園事業です。

(南予健康福祉環境部地域福祉課長)

南愛媛病院に障害児等の関係を担っていただいておりますが、東温市にあるこども療育センターとの関係で言えば、通所事業として八幡浜市から今治市くらいまで、車で送り迎えをしていると思います。そのスタッフは、保育園等の要望を聞いて、医師やリハビリを受け持つ機能訓練士等が出向いて行って事業を実施したりしていますが、それもどこまで行き届いているかということは、直接こども療育センター若しくは南愛媛病院の方に聞いていただければ、もしかしたら何かのお手伝いができるのではないかと思います。

(参加者)

地方局には、2年位前からお願いをしていますが、なかなか資金面での苦勞がありまして。県や国の方から助成金等がありましたら。

(南予健康福祉環境部地域福祉課長)

申し訳ありません。助成金の関係は分からないのですが、こども療育センターや南愛媛病院の方は、医師や機能訓練士等のスタッフに限りがあるということで、仮に出向いて行ったとしても、年に1回か2回、宇和島の保育園に行くのが、今は精一杯だと思います。

《後日回答》〔南予地方局長〕

愛南町にあります「通園(デイサービス)事業おれんじくらぶ」は、愛南町が児童福祉法に基づき障害児通所支援事業を行う施設で、愛南町では、社会福祉法人御荘福祉施設協会に委託してこの事業を実施しております。

この「おれんじくらぶ」が行う事業につきましては、発達障害を含む障害のある児童を対象とするもので、日常生活における基本的動作の指導や知識技能の付与、集団生活への適応訓練を行う「児童発達支援」と、放課後や夏休み等の長期休暇を利用して自立支援と居場所作りを目的に生活能力向上のための訓練を行う「放課後等デイサービス」です。

今回の御質問につきましては、「おれんじくらぶ」を中学生以上も利用できるようにとの趣旨と受け賜りましたが、事業主体の愛南町に照会しましたところ、プールを利用した一部の活動には中学生の参加もあるが、予算措置上、一般的に中学生を受け入れることは現状では難しいとのことでした。

なお、同じ愛南町内(御荘菊川)に今年開設されました「NPO法人CASA JOHANN E ヨハネの家」では、現在、「おれんじくらぶ」と同種の事業を中学生以上も受け入れて実施しておりますので、御不明な点等がございましたら、当該施設に直接お問合せいただきますようお願いいたします。

4. 県立南宇和病院の動向についての情報公開を

「あいなん小児医療を守る会」は、南予地方局であった県主催の小児医療学習会に参加した時に、愛南町はどうなっているのかと思い、自分達で、愛南小児救急医療学習会というのを開いたが、その時の参加者のうち賛同者48名で立ち上がった。愛南町にある県立病院のことに「麻酔科がなくなったみたいよ」とか漠然とした感じで、私達の知らないことが多すぎるなと感じた。県の方からも情報の公開をしていただきたい。

また、「守る会」だが、今、補助の申請をしている。資金面で苦しいので、補助があればと思

っているのをお願いします。

【知事】

情報公開というのは難しい課題で、県がどれほど情報を提供しているのか分からないのですが、どちらかと言うと、県の情報はいくら出しても余り関心を持たれないところがあります。市町村の情報は身近だから、結構住民の皆さんも見られる。例えば、県庁へは来ることないでしょう。直接住民の方が出入りする役場ではないんです。誰か来るかということ、市町の役場の方とか、役所の方々とやり取りするという職場です。私は、松山市から県に来たのでよく分かりました。松山市は、愛南町もそうですが、しょっちゅう市民の皆さんが、或いは町民の皆さんが出入りする場所です。だから身近になるので、そこから発信される情報によく目を向けられるのです。かつては、今は移しましたが、一般の方にとって県庁に行く用と言えばパスポートだけだったんです。そういう中から出てくる情報は、素通りされてしまう傾向が非常に大きかったんだなと感じます。一方で、情報を提供する側から見ると、ありとあらゆることをやるしかない。例えば、全戸に広報紙を入れても、当時、松山市は16万戸ありましたが、16万戸全部入れても、いったいどれだけの人が見ているか。ともかく全戸に配ったから情報を発信したという所で止まってはダメだと。それだけでは、見てくれる人見てくれない人がいるので、インターネットを活用したり或いは提言ポスト制度を作ったり、双方向で、ともかく窓口が常にあるって色々な媒体を使って情報を発信していこうという、気が付いたことは全部やって、それでもたぶん伝わりきれないと。永遠にこの議論は続いていくんですが、ともかく気が付いたことをやっていくということやるしかないなと思っています。もちろん目を向けていただけるようにちょっとしたアイキャッチであるとか、見易さであるとかそういったことも工夫しながら情報を出していくという工夫も大事だと思います。今は、行政が情報を隠すということはほとんどないですから、情報の公開をしていないということはないと思います。ただ、それをうまく伝える方法ができていないのかなという感じがしますので、その辺りを確立していきたいと思っています。

それから、助成金というのは、うかつに今、すぐに云々という訳にはいかないと思うのですが、県庁も、先程話しました三位一体の改革で、ずたずたの財政状況にあって遣り繰りをしているのが現実であり、打出の小槌があれば何でもやりたいのですが、必要性というものを考えながら。それともう一つ、先程、何で活性化の話をしたかということ、福祉の充実と教育というのは、誰しも求めるところでありますが、財源がなかったらできないので、ともかく元気にして増やしていけないと。それが増えると、色々な手立てが打てるようになる。活性化というのは、実は、全部一蓮托生の関係で、地域が元気になって初めて福祉も教育も充実させることができるという密接に関連しているということで追い求めているということは、是非、御理解をいただきたいなと思っています。

（参加者）

情報の公開に関しては、県立南宇和病院のことが、本当に私達びっくりしたので。でも難しいですね。

（南予保健統括監）

情報の提供につきましては、3年くらい前から南宇和病院が危機的状況にあると分かっていたので、一昨年に、愛南町と共同で、旧町村ごとに愛南医療懇談会という会議を開催しまして、南宇和病院の中村院長先生に、南宇和病院はこんな状態だと実態を言っていただき、4月頃から、皆さんにコンビニ受診とか不要な受診を控えていただくということでお願いしまして、1年間で、5、6百人の方々に懇談会に来ていただいたりしました。

それと、町の広報紙等でも、南宇和病院の現状についてお伝えしましたが、それでもお伝えができていなかったのは、こちらの不徳の致りということで、お詫びいたしたいと思っています。

今回、南予地方局の予算で、南予の小児救急医療を守る対策事業として、先程の「あいなん小児医療を守る会」もできましたので、そういう会を通じて、どんどん保健所等に呼び掛けていただければ、情報を隠すことはありません、十分に情報を提供させていただきますので、こちらにもお問合せいただいたらと思います。

もう一つのお金のことですが、民間のNPO法人に近い形で会ができましたので、そこは、いかに町民の方に広げるかがポイントです。一番身近な行政機関である町と協議をすれば、ひょっとすれば、何かしらの援助があるかも知れないと思います。また、そういう面で困ったことがありましたら、是非、保健所の方にご相談いただけましたら、こちら喜んでお答えしたいと思いますのでよろしく御願います。

(参加者)

情報をいただいて、それを私達が学んで伝えるというのが、私達「守る会」のテーマとしておりますので、今後ともよろしく御願いたします。

【知事】

医師不足の中で一番深刻だったのが、実は小児医療です。医療の世界では点数制度というのがあって、聴診器をあてたら1点とか、喉をみたら1点とか、注射を打ったら3点とか点数制度です。その点数に基づいて、お医者さんに保険の中から支払われる収入は決まっているという制度です。今もそうですが、とりわけ小児科は点数が低かったんです。収入が少ないということになり手がなくなり、小児科の先生が激減しました。数年前に点数を少し上げたので、多少は戻ってきているかも知れませんが、そもそも小児科の医師不足が深刻になっています。

これも松山市時代のことですが、たまたまテレビでニュースを見ていたら、埼玉県で赤ん坊が夜熱を出して、若いお父さんお母さんが病院を探し回ったけど誰もいない、ぐるぐる回っているうちに赤ん坊が亡くなってしまおうという痛ましいニュースが流れました。そこで、当時の松山市で、一つの大きなプロジェクトを立ち上げて、365日24時間小児救急医療体制を松山圏域で作ろうということを始めました。ところが、松山市には、56人の小児科の先生しかいませんでした。投げ掛けたらそんなの無理ですと。この人数で、一体どうやってやれというのですかと。じゃあ人数が足りないんだったら周辺の中予地域の先生に声を掛けようと、声を掛けたら75人になりました。75人ではそんなの無理ですと。今度は、大病院の小児科の先生に声を掛けたら、九十何人になりました。それでも無理ですと。諦めていた時に、日赤の先生が、日赤の他の県の小児科の先生に知り合いがいるから声を掛けても良いというので声を掛けてもらったら、110人体制になり、それで何とか始まったんですね。でも、これもいつ崩壊するか分からない状況です。使う側にも問題があって、ちょっと咳きをしたらあそこが開いているから行こうと行って連れて行く訳ですよ。小児科の先生の体力が持たなくなってしまう。それで辞めたいと言う。物事というのは難しいなと思いました。実態として、今の医師不足の背景には、さっきの研修医制度の問題や点数制度の問題とか、根本の制度の問題があるということは、是非、知っていただけたらと思いますし、いなくなったということは、何もしていないだけではなくて、実は、その背景には何かあるのかということを知解していくと答えが見えてくるのではないかなと思います。

もう一つはNPOについて、愛南町でやっているかどうか分かりませんが、県にもありますが、松山市では、個人や企業から協力をいただき、NPO支援制度というのを作りました。マッチングギフトと言ってちょっと難しい言葉ですが、例えば10万円寄付をいただいたら、市の予算から同じ10万円を出して20万円にすると、こういうふうにマッチングさせて、それで基金を充実させていったんです。それで集まったお金に対して、市内のNPOから、立ち上がったなら是非助成して欲しいとの申請があります。税金を入れる訳ですから公平な委員さんに審査してもらい、中味をしっかりと見て、運営がしっかりとしているか目的は合っているかを審査してもらい、その審

査をパスしたところに立ち上げの支援制度とその後のフォローアップ支援制度の2本立ての制度にした。立ち上げの時は、年間20万円とかの金額で、もうちょっとあったかもしれませんが、初年度は立ち上がりで大変なのでそういう支援をして、少し減らしながら3年くらいバックアップする制度を作ったことがあります。当初税法上の問題がありました。企業が社会福祉法人に寄付したら、企業はその寄付金を損金処理と言って利益から差し引くことができたんです。税金が安くなるんです。個人が、社会福祉法人に寄付した場合も同じで、年末調整で税額控除の対象になる。ところが、NPO法人に関して言えば、法律でNPO法人法というのができて法人格が与えられたのですが、税制上の優遇措置がなかったんです。企業は、NPOが法人格になったが、寄付しても損金処理できないのでいやですと。或いは個人がNPOに寄付しても税額控除を受けられないから勘弁してくださいということで集まらないという現象が起きます。そこで、NPOに対するそういう特典がないのであれば、松山市で全部引き受けちゃう。松山市が窓口になれば、企業は損金処理できるし、個人は税額控除ができる。こっちで一回迂回してNPOに回していこうという中から考えた制度でしたが、今は、申請のハードルは高いかも知れないのですが、申請して審査がパスされれば、税額控除を受けられる法人の資格を得られる制度に改正された、ちょっとそこは責任が持てないですが、そんなルールがあります。

5. 県境を越えた連携について

虹の森公園は、オープンして15年を迎えた。年々、南予の集客が少なくなって大変危惧していたが、高速延伸に合わせていやし博をしていただき、集客力に大変効果があったと認識している。次のターゲットは、高知の窪川までの延伸というのを狙っている。窪川まで延伸すると三間から窪川までの区間が、高速道路のない四万十ルートとしてかなり注目される区間になると思う。そこで、県境を挟んだ道の駅、私どもの「虹の森公園」と高知側の「道の駅十和」で、県境を越えた連携プロジェクトを進めている。高知からのお客さんを愛媛に、愛媛のお客さんを高知に呼び込み、お互いがウィンウィンになるような関係を築いていきたいと思っている。愛媛側の受け皿としても、三間から肱川、城川、大洲の沿線の道の駅で独自に協議会を作って連携を始めているところであり、県境を挟むということで、是非とも愛媛県と高知県の県の間でもガッチとスクラムを組んで、この県境に人を呼び込んでいただけるようにご指導をいただきたいと思っている。

【知事】

高知との県境を越えた取り組みというのは、私も関心が非常にありまして、先週、高知の知事と私の方で、両県の知事会を開催したところで、場所は「道の駅十和」でやりました。「道の駅十和」は、なかなか工夫をしています。一番関心をしたのが、新聞紙を使った紙袋を世界に出すんだと言って売っているんですね。新聞紙を使って、こうやればしっかりとした強度を持った紙袋ができますと。しかも工夫によって表面に出したい記事をこういう配置にすればここにもってこれますと、作り方までキットになって売っているんです。新聞紙袋セット。特許まで取ったと聞きましたが、色んなことをやっているなということで驚きました。

もう一つが海洋堂。おもちゃのホビー館。あれに行ってきたんですが、今第二期工事に入っていて、今度はカップ館を作る計画で、道さえできれば凄く面白い空間になるなと思っています。

もう一つ感じたことが、前面を流れている四万十川が、愛媛側の川とは風景が異なるということ。あちらの川は川幅が広い。愛媛側は川幅が狭い。その違いこそ魅力かなと思っています。今は、県境だけを考えた場合は、愛媛側からあちら側に行くお客さんの方が多いということは聞いていますが、実は、全国での知名度で言うと、四万十川は、やっぱり強いインパクトを持っているので、むしろこの道路整備の完了後の県境のプロジェクトは、こちら側が四万十の知名度を

活かさしていただくということに繋げられるのではないかなということを考えながら帰ってきました。先程の川の質の違いもある。渓谷と大きな川幅の組み合わせ。それぞれ大事なことは、こちら側は何が魅力になり、あちら側では何が魅力であるかというのを見極めて、それをどう組み合わせせてセットにして情報発信ができるかということが鍵を握っているのではないかと思いますので、是非、地域住民同士の交流を含めて前進をしてもらいたいと思います。

6. 宇和島水産高校の金魚の品種維持への取り組みについて

高知県には「土佐金」という金魚が、1845年くらいから高知県の特産として有名だが、愛媛県にも、先人が、脈々と受け継いできた金魚がある。ほとんど知られていないと思うが、「四国オランダ獅子頭」という金魚。この金魚が日本にやって来たのは1800年代の江戸時代で、長崎から江戸まで広まったが、長い年月のうちに絶えてしまった。これが、愛媛県と香川県のごく一部の愛好家の間で受け継がれており、最近全国的に見直されてきているが、その愛好家も少なくなり、品種の維持を危惧していたところ、私どもは数年前から始めていたが、宇和島水産高校が、地元の金魚を維持したいということで、一緒に協力してやっていこうということで今年から活動を始められた。愛媛県としても、そういう金魚がいることを認識していただき、県の金魚になれば最高だが、広報的などを御願する。また、高校生の取り組みに対してご理解とご指導をいただけたらと思う。

【知事】

金魚は全然知りませんでした。申し訳ありませんでした。ランチュウと金魚は違うんですか。

（参加者）

ランチュウは、金魚の一品種です。

【知事】

認識いたしました。

〈補足〉〔農林水産部〕

県水産研究センターでは、魚介類の飼育技術の研究や病気の検査等を行っていますので、具体的な相談等があれば、ぜひ活用してください。

7. 「食」の関係の戦略について

人口が減っていく中で、観光客を誘致して何とか生き延びるため、私どもは料理関係者ですから食で呼ばなければならないということで、先日、宇和島鯛めしをいやし博に乗っけて発信していくため、宇和島鯛めし協同組合という組合を仲間達と作った。今からどんどんPRをしていき、日本中が知ってくれて宇和島に鯛めしを食べに行こうというようにしたい。先程、愛媛県に営業部ができて、農林水産業や工業部品を打ち出されているということだが、愛媛県として食の関係について県外に打って出る部分で、現状と戦略があればお聞かせ願いたい。

【知事】

食と言っても、県の場合、素材が中心になっているのですが、ただ、観光という観点で考えた時には、食を抜きにして観光客を引っ張るのは難しいと思います。グルメというのも観光客を呼ぶために非常に重要な要素になっていますので、例えば宇和島鯛めしなら県内の人間は知っていますが、さすがに全国という所まではいっていない。ではそれをどうするか。例えば、生ものは難しいかも知れませんが、今治がやったようにB級グルメグランプリを目指すとか。焼き豚たまご飯はあれのおかげで一気にパーッとですから、何かそういうものにチャレンジするののも一つの

手かなと。もう一つは、例えば、私も、宇和島に行った時は宇和島鯛めしを食べますが、その割に連携している情報がない。例えば、松山市だったら、三津浜にはお好み焼き屋が十何件とかありますが、バラバラにやっていてこれじゃあダメだということで、浜焼きという名称で、三津の浜焼きマップみたいなものを作って、来た人に最低3軒は味あわないともったいないと、こういうアピールしたら良いとまちづくりの中で言ったんですが、宇和島には、いっぱい美味しい店があってそれぞれ店によって味が違うはず。そういう鯛めしの里みたいな形で、来たら分かるような情報発信ツールが必要ではないかなと感じます。間違いなく宇和島の鯛めしは、全国に出しても全く恥ずかしくない。人気が出ると思いますので、応援はやぶさかではないですから、一生懸命後押ししたいと思います。

もう一つ、人口が減るということをおっしゃいましたが、これから日本全体が減っていく中で、過疎地域と言われている所はさらに減り方が早いのですが、すぐに子どもを生めよ増やせよと言う訳にはいかないですから、逆転の発想でこんなことを考えました。これは島の人たちの話ですが、島は、道路はできたが過疎化で車は通らないしなと、こうなったら逆転の発想でいこうと、車が通らない整備された道路というのは、誰が喜びますかという発想に変えちゃった。そうすると到達した結論がサイクリストだったんです。サイクリストというのは、車が通らない舗装された道路は、最高のパラダイスです。だから、例えばしまなみ海道というのは、世界のサイクリストに情報発信できる要素を持っていますが、実は南予にもサイクリストが行ってみたい場所がいっぱいあります。市長さんや町長さんに申し上げたのは、愛南町は今回やっていただいたようですが、愛南には愛南のサイクリングロードがある。宇和島エリアにはこういうサイクリングロードがある。松野もある。愛媛にはサイクリングロードが至る所にいっぱいある。こういうことがもし実現できたら、しまなみ海道にはたくさん来ますから、そこに情報提供します。しまなみよかったな。いや実は、愛媛にはもっと南の方に行くと、こういう風景をもったサイクリングロードがあるんですよと言ったら、じゃあ次はそっちに行こうという形にもって行ける。そこにあるものを使いますから、そう莫大なお金がかかる訳ではない。例えば、サイクリングの人たちが迷わないようにブルーラインを引いたり、大体全長で70kmから100kmです。80kmくらいかな。それが一日で走れる丁度良い距離です。短すぎてもダメだし長すぎてもダメで、70kmくらいをコース設定したマップを繋ぎあわせていくというのは面白いことかなと思っています。

8. 過疎対策について

ちょうど過疎化の問題が出たので、その点を聞いてみたいと思い質問する。日本全国で過疎化の問題は色々あると思うが、特に南予地区、南予地区でも山間部は、皆が思っているより過疎化や少子高齢化が進んでいると思う。若い子どもを持った家庭の特に奥さん方に、今後10年経って子ども達が大きくなった時に、この地区は一体どうなっているんだろうという不安を持っている人が多い。県も過疎化の問題については、色々な対策をしてきていると思うが、短期的なものではなくて長期的なものなので、なかなか目に見え難いものがあると思う。県としてどういう対策をしてきているのか教えていただきたい。

【知事】

一番難しい質問です。その答えがあれば、日本の国は大丈夫というくらいの大テーマですね。正直言って明確な答えがある訳ではありません。私もずっとやってきて、自分の中で答えが見出せないのが、この過疎集落対策と中心市街地活性化。この二つは、やってもやっても出口が見えない中で、やり続ける以外にない分野だと思っています。人が減ってしまう中で、業が成り立たないということに尽きると思います。一次産業での業が成り立てば、人々は来る訳ですから、南予は特に、一次産業のてこ入れということが、一つの大きなテーマだと思います。その中で、農

業の場合も林業の場合も、ほとんどが国が基盤整備を担当していますから、県の立場から言えば、苦手な分野かも知れないですが、いかに営業という観点を入れて、ブランド戦略を打ち立てて、営業戦略を打ち立てるか。そして、愛媛産のものが広く受け止められることによって、良い値で売られて、全国に認められるようになれば、一次産業に従事される方の実入りが増えていき、実入りが良いということは、業として成り立つということに繋がり、そうすると後継者が入ってくる。だから一次産業の活性化というのが、一番大きなポイントだと思います。そこを抜きに、いくら若い人たちが帰ってきてよと言っても来ないですね。ここは徹底的に追求していきたいと思っています。

（企画振興部長）

行政としては、知事が申された通り、なかなか決め手はありません。法律的には、過疎地域の振興の法律があって、去年も、西予市宇和町で、過疎地域振興の全国大会が開かれ、それぞれの地域での活性化事例の発表がありました。ほとんどが行政レベルであったり、地域でのNPOやまちづくりの人たちの活動になってくると思いますが、過疎振興のための色々な仕組みはありますが、ただ決定打はありません。その仕組みを使いながら、できるところまでやっていくしかないと思っています。県としても、色々な助成の仕組みはあります。過疎の応援団というのがあって、応援団を作って、過疎地域に都会の人が地域に入っていって動いてもらうような仕組みもありますので、個々の事例については、個別に相談いただければ、支援する仕組みはありますのでよろしく御願いたします。

9. アンテナショップの開設について

愛南町で、愛南ゴールドを中心に栽培しているが、いくら愛南町が生産日本一だと言っても全国的にはほとんど知られていない。PRの方法には色々あると思うが、まだまだ宣伝効果が十分出ていると思う。インターネット等に、愛媛の柑橘にはこんなものがあるということは載っているが、それでは宣伝効果が十分ではない。実際にみかんを見て、食べて、それで初めて良さが分かると思う。県がバックアップしてでもアンテナショップ等を増設し、実際に食べていただいて宣伝をすれば、たいへん有り難いと思う。東京の新橋にあるせとうち旬彩館というアンテナショップでは、毎月イベントをやっていて効果が十分にあるのではないかなと思う。ああいうアンテナショップを大都市圏に数多く開設すれば、宣伝効果も十分にあると思う。

また、先程知事は、海外戦略についてお話をされていましたが、愛媛の柑橘も魚といっしょに是非海外に進出をして宣伝をしていただければ有り難いと思う。

【知事】

愛南ゴールドの全国での知名度はどうかというと、確におっしゃるとおりだと思います。但し、愛媛のみかんというのは、知名度抜群です。これは、東京に行ったら「お前の家本当に蛇口からポンジュースが出てくるんかい」というくらい、ポンジュースの威力といえば、愛媛と言ったらみかんというイメージができています。そこは自信を持って良いと思います。

ですから、そういうのに乗っかって行かないと勿体無いと思います。愛南ゴールド単体では、なかなかこれは難しいと思います。愛媛の豊富なメニューの中で、この季節は、愛媛みかんと言えば愛南ゴールドという形で組み立てていった方が、浸透が早いと思います。愛媛県としては、そのインパクトをもたらすために、例えば、イメージキャラクターとしてインパクトのある県人に手伝っていただくとして、去年は松山の関係だったので友近に力を入れたり、先月は、新居浜出身の水樹奈々というアニメ界の子に力を入れて南予の宣伝をしていただきたくと。その彼女が「今度いよ観光大使になりました」とブログに載せたら、何百件という若者がバースと見ます。これは、私らの知らない世界です。コンプガチャみたいな世界だと思います。情報波及力という

のは凄いの、ああいう子たちが、愛南ゴールドが今の季節美味しいよと言ったら、どんどん反応して行きます。そこからまたネットで広がっていくので、こうした時代の便利なものを活用しながらやっていく必要があると思います。

アンテナショップは、経費がかなり高くて、単独で出すのはきついの、香川県とその辺の意見が一致して一緒にやることになりました。今、香川県がうどん県で注目を浴びて、すごく伸びているんです。あそこは確かに成功例だと思います。アンテナショップは、固定した場所での長期契約になりますから、特に、目立つ場所ということになりましたら家賃なんかべらぼうに高いので。特に東京は。そこまで踏み切れない財政状況ですが、今年の2月に原宿で1か月間提携して、愛媛フェアをやったんです。こうしたターゲットを決めて闇雲にやるのではなくて、場所と年代層と、その年代層に売り込むためにはどういう種類をそろえるかという戦略を駆使する中で取り組みを進めていきたいと思っています。先週は名古屋で、期間限定ですが、初めてアンテナショップを出すことにしました。東京、名古屋、大阪、福岡、もう少しいけば札幌くらいが一つの商圏かなと思っていますので、やっていきたいと思っています。

【補足】〔経済労働部・農林水産部〕

アンテナショップの増設のように、固定的な施設を新たに設置してPRや販路拡大等に取り組むことは、費用対効果の面からも現実的ではないと考えられますが、県産品のPR等については、既設のアンテナショップなどの拠点を活用していくことはもとより、各種フェアなどの事業の中で、効果的に取り組んでいきます。

また、今年度、2月の1か月限定で表参道エリアにおいて、若者、女性をターゲットに柑橘をはじめとした愛媛産品をPRするプロジェクトを計画中です。常設のアンテナショップではありませんが、その1か月は特徴ある愛媛産品を、複数の店舗で、その年代層に受け入れられるようなメニュー開発などを行い、情報発信も合わせ、多くの人に知ってもらう取組みを行う予定です。

10. 長期的・計画的な農地の管理について

農地をいかに守るかということ、地域地域で個々に考えていてもダメな時代だと思う。愛媛県や四国といった大きな単位で、どのように農地を守り、どのような農地は転用するのか、大きなビジョンをもって計画的に土地の管理をすべき。集約的に、この地域ではこういったものを作るといった計画性をもって進んでいく必要がある。過疎や少子化で、高齢者でどこまでできるのかという問題と後継者がいないという問題が当然出てくるが、それも含めて、計画的に集約的なものをすれば、若者が集まり一生懸命働いてくれる地域になると思う。農業委員会で農地は管理されていると思うが、農業委員会は農業に携わっている方達で構成されている。農業に携わってなくても、これからの日本の土地をどのように利用しようかと考えているメンバーも入れて、長期的・計画的な農地の保存や変更といったことも考える必要があると思う。

【知事】

おっしゃることはよくわかりますが、法律の壁とあの世界の人々の壁、この2つが非常に強い障壁になっています。これは農業委員会だけではないのですが、これは色んなご意見もありますが、農協もそうです。今やこれだけの国際競争があって、日々刻々とした変化を受けながら経営戦略を立てて、そして、販売に挑戦していくということになれば、今の農協は、理事制度で選挙をやる。昨日まで農業に従事されていた方が、ポンと役員になられたりする。しかし、その人が、急に国際競争の場に出て戦えるかどうかという議論をしていく時期が来ているのかも知れません。制度の壁が実際にはあるのです。

11. 第一次産業の売り込みについて

第一次産業の売り込みを賑やかな所で華々しくということもあるかと思うが、団地には、すごい人数がいる。一般消費者の方が、そこに住んでいる。そういう人達に受け入れていただければ、大量に一括で売り捌ける。そういうところを見つけていくことも必要。精米したものを持っていくと期間が短いので、玄米を持って行って、そこに精米所を設けて、精米しながら食べていただくと長い期間美味しく食べていただける。アンテナショップにプラスして、実際に売れる場所を見つける。そうしたものを狙って、確実に契約していただける消費者の方を見つけなければ、我々の産地で作ったものが消費していただけるのではないかなという気がする。

【知事】

もう一つの戦略としては、都心部のスーパーマーケットとの連携を進めています。まさにスーパーマーケットというのは、団地とかを商圈として持っていて、イオンとか東京の地域の専門スーパーとかと提携をして、そこに愛媛コーナーというのを作っていただき、こちらから配送して提携するというようなことをやっていますので、それは団地対策に繋がっていくと思います。

今日のスーパーマーケットは商談が厳しいですね。あまりやると採算もあわないですから、その辺りを見極めながら進めていきたいと思っています。ただ、評判は良いです。愛媛県産品について、特に柑橘。私は柑橘の商談はかなり行きましたが、どこに行っても評価は、食べてみたら美味しいと。ただ、一方で品質管理の指摘を最近受けるようになりました。これは難しいんですが、例えば、高級果実があって、作っても品質がよくないとどうしてもセンサーではねていかなければならない。はねられてしまったものも、同じように作ったものだから売りたいという。でも実際売られた品種がすごくクレームを受けています。それに値するような商品ではないんじゃないかというクレームが入って、それが市場に反映されて大暴落しています。この辺のさじ加減が難しいと頭を痛めているところです。良いものをしっかりと提供し続けるということが、消費者の信頼に繋がり、それがまた、口コミで繋がっていくということだけは間違いない。この点も配慮しながら都市部における戦略を考えていきたいと思っています。

12. 「ゆず」と「しいたけ」の宣伝について

鬼北町の山間の地区に住んでいるが、今年、小学校に入学した子どもが4人で、今年度生まれる子どもは1人です。この先、子どもがいなくなるのではないかなと不安に思っている。私達の地域は、高知県との県境で、ゆずとしいたけで頑張っている。ゆずとしいたけについて前向きにもっと宣伝があったら良いと思う。知事にも、山間の方にも足を運んでいただき現状を見ていただきたいと思う。

【知事】

ゆずもしいたけも生産量から言えば高知県の梶原の地域ですよ。しいたけで言えば、愛媛県は大分に続いていると思います。ゆずも生産量は、特に鬼北を中心に非常に質の良いものを作られています。愛媛県の人々の良さなのか県民性なのか、それを一番高い所に持って行く所での他の県にとられてしまうというケースがやたら多いという気がしています。ゆずだって量的にも作って他にも出しているのに、何とか村というところが独占しているような状況でしょう。完全にゆずといえはそこになっちゃっている。こちらは提供するだけ。真珠にしても、宇和島は、真珠の生産は日本一ですが、製品という付加価値のあるものは全部三重になっちゃう。豊後水道にしても、豊後水道で捕ったアジやサバは、同じ所で捕れているのに、大分のブランド戦略でとられちゃったという歴史ですね。そこら辺の戦略が弱かったのかなと思っています。私も、ビジネスをやっていたので、そちらの方が得意なところですから、根本的にそういうところの活力を注入す

る必要があるということで、今、色々なアイデアを寝ながら考えて実現に移している最中です。すぐに結果は出ませんが、着々と、先程の愛育フィッシュから始まって色々な戦略を、思い付きだけではなくて統計的に考えながらやっていますので、是非皆さん共有をお願いします。そのためには、皆さんも同じ気持ちになってくれないと無理です。私がいくら宣伝しても、地元が「さあ、どうなのかねえ」では外に伝わらないだろうし、例えば、いくら愛育フィッシュとか言ったら、作っている人が「いやいや養殖や」と言ったら、やっぱりそうじゃないかとなってしまいます。その辺を説明しながら、皆さんを巻き込んで進めていきたいと思っております。

（参加者）

人口を増やす一つの手として、テレビでもやっていますが、お見合いとか、こういう田舎でも来たいなという人がいると思いますので、そういうことをどんどんやってもらったら増えるんじゃないかなと思います。

【知事】

町の方がメインになるかもしれませんが、愛媛県も婚活を立ち上げて、これは成婚率が非常に高いということで注目をされているやり方ですが、例えば、それを南予で重点的に仕掛けるとか、町から色々な仕掛けの話があれば動きやすいと思うので、是非、町の方から議論をしていただきたいと思えます。

《補足》〔農林水産部〕

しいたけに関しては、鬼北産を含む生しいたけの「媛王」、乾しいたけの「えひめ産乾しいたけ」をえひめ愛フード推進機構が「愛」あるブランド産品に認定し、愛媛の上級品として、その価値や特長について広く情報発信しています。

また、ゆずに関しては、県やえひめ愛フード推進機構が、合同産直市や大街道マルシェなど産品の販売とPRに繋がるイベントを開催しており、今後もJAや販売業者、産直施設に参加を呼びかけることで、鬼北町特産のかんきつとしてゆずの販売促進やPRに努めます。

13. 若者達が農業に入っていけるよう研修の機会の提供を

農地の関係、機器の問題などで、若者たちが農業をするには非常にハードルが高い。耕作放棄地を見て心を痛めている若者が多いが、自分達に何が出来るか、取っ掛かりが全く見えない。その中でも、農業での生活を夢みている若者が、鬼北町には結構多いということを知る。先日、野菜づくりが上手なおじさんが脳卒中で倒れ、周りが農地の斡旋等にあたふたしていたが、農地だけの問題ではなく、その方の技術、知識や経験からきたノウハウをどうやって若者に伝えていけば良いのか。農業の技術をどんどん若者に普及できたら良いと考えている。担い手公社の事業など、農業で生活していくと決めればそれなりの道は開けるが、農業で生活して子どもの学資を出してというところまでは難しい。若者たちが皆で集まって色々なことに挑戦して、例えば、軽トラマルシェでもやりなさいよと言っても、そこに行くノウハウを若者達が身に付けられない。若者たちが簡単に農業に入っていけるような研修の機会を与えて欲しい。

（南予産業経済部長）

新規就農については、お話のとおり、農業の分野では、就農者の高齢化が進んでおり、農家の平均年齢が67歳くらいになってしまうということなので、5年先、10年先の事を考えると若い人に新規就農をして欲しいというのが、県の非常に大きな願いであります。

そのため、今年度から新しく新規就農総合支援事業を創設しました。新しく就農した方、或いは就農に向けて研修を受けた方に、給付金を交付しようという事業です。年間150万円になっていますが、色々な条件がありますので、詳しくは市町にお尋ねいただいたら良いかと思えます。

例えば、45歳未満でないといけないとか、市町が作る「人・農地プラン」に位置付けしていないといけないとか、色々な要件があります。いきなり就農といっても思い付きにくいというお話がありましたが、松山市の話になります。松山市の農業大学校で農業入門塾をやっている、これから就農したいが、本格的にやれるかどうかちょっと迷っているという人でも受けられるような短期間のコースや、もう少し頑張ってみようかという人のための担い手支援塾のコースも作っていますので、こういったものをご利用いただければ有難いと思います。

【補足】〔農林水産部〕

(公財)えひめ農林漁業担い手育成公社では、就農相談窓口の設置や県内外で就農相談会など就農希望者の掘り起こし活動から、先進農家での研修や資金の融資など定着支援活動まで円滑な就農ができるよう幅広い支援策を講じています。

中でも、「営農インターン推進事業」では、就農予定地の先進的農家を斡旋し、実務研修を行うことができるので、積極的な活用をお願いします。

また、県立農業大学校では、意欲と能力のある多様な人材の確保するため、一般社会人を対象とした実践研修を行う「えひめ農業入門塾」や、より実践的な技術習得を目的とした「農業担い手支援塾」、離職者を対象とした「農業訓練講座」を開設していますのでご活用ください。

14. 「ふれ愛・媛ポーク」について

愛媛は、中四国一の養豚県だが、その中で、愛媛のブランドとして頑張ろうと10年前から「ふれ愛・媛ポーク」を立ち上げて頑張ってきている。どうしてこれだけ時間がかかったのかわからないが、やっと今年、愛媛のブランドに認定していただいた。そのことに関しては、農家皆喜んでいて、甘とろ豚と同じく、愛媛の誇れるブランドとして頑張ろうという気持ちを持っているが、先日の甘とろ豚の試食会の中で、知事が「この肉は違いが分かるよね」とおっしゃったのを聞いて、若干、寂しい気持ちが出た。愛媛県内には、外にもJ A系統なり数多くの養豚農家がいる。愛媛の皆さんに安全・安心で美味しい畜産物を供給しようと頑張っているのに、甘とろ豚を売らないといけない事情は良く分かるが、甘とろ豚に踏み切れない農家の事情もお分かりいただいて、できれば甘とろ列車の向こうにブランドの畜産物の絵を書いていただくなり、もう少し他の畜産農家の力にもなっていただきたいと切望している。

【知事】

実は、加戸前知事の時代ですが、愛媛県で全国に通用するブランド豚を開発しようと、県の畜産研究センターで、愛媛県産のはだか麦を使って一から作り上げた製品だったんですが、試験でコラーゲンの量とかデータのもしっかり評価しています。ただ、若干小ぶりで、育てるのに通常6か月かかるところを甘とろ豚は7か月かかり、コストも通常の豚よりかかるのですが、それでもやろうということで、やったらいいですね。最初は経済連も一緒にやっていたようですが、ところが、途中で、経済連が甘とろはきっとダメだということで、途中でいなくなっちゃったんです。経済連は、愛媛県につき合って甘とろ豚をやってもダメだろうから、別のにしようという方向が分かれた経緯があります。

(参加者)

ただ、我々は、そのずっと前から「ふれ愛・媛ポーク」と愛媛の名前をいただいて立ち上げてブランド化して、品質の均一化や農家の意識を高めるなどの努力をずっとしてきましたので、甘とろ豚を作った時も、試験農場の方も知っていますし、家畜保健衛生所の試食会や農家への働き掛けにも参加し、大体の経緯を知っています。ただ流通に乗せにくいとか、脂肪分が多くて普通の格付けにはできない、その辺りの問題で品質にバラツキがどうしても生じ、美味しい肉もある

が、はずれると難しい、そうしたこともあり、「ふれ愛・媛ポーク」できちっと立ち上げてきたものを変えてしまうのはどうか、「ふれ愛・媛ポーク」は、近畿圏で良い評価をいただいているので、もう少し情勢を見ようという農家が多かったと思います。先日の試食会のニュースでは、もっと生産農家を増やし、今年 2,500 頭ですが、3,700 頭の出荷を目指すと言っていましたが、その売れ行き状況がどうなのか農家には分からない。県内全部の農家が、甘とろ豚の売れ行きにはすごく注目はしています。ただし、飼育・繁殖の難しさがあるので、なかなか踏み切れない所があり、と場の問題もあるし超えないといけないハードルが高いと思う。今まで、媛ポークとして色んな所と専売契約を結んでいたりとか、うちでは生協に出しており、そうした契約上の付き合いがある中で、なかなか甘とろ豚に替える訳にもいかないし、今、現在、甘とろ豚に変えても、全頭すべて甘ト口豚に変えるかと言うと、売り切れないのは分かっているし、需要調整が入ってくることも皆さん知っているので、なかなか難しい問題があります。ただ、県の方が甘とろ、甘とろとすごく宣伝されるので、県内の消費者は、甘とろ豚の名前を知らない人がいないくらいになり、消費者は、「なぜ甘とろ豚にしないの、ふれ愛・媛ポークが甘とろ豚に替わったんでしょ」という認識をされる方が非常に多い。「県知事も絶賛しているのに、なぜ甘とろ豚を飼育しないの」と言われるが、そういう流通上の問題や、その他の問題を抱えていて、決して甘とろ豚の成功を望まない訳ではなく、愛媛を担うブランドとしてしっかりやっていただきたいとは思いますが、甘とろ豚の農家の戦いも皆知っていますし、どういう思いで取組まれているのかもよく知っていますので、是非成功していただきたいのですが、私たちも愛媛のブランドとしての誇りを持って育ててきた、そういう思いを県も汲み取っていただきたい。今度、牛の開発にも取組まれると聞いていますが、その時に、牛の方も同じ思いをするのではないかと皆さん心配していますので、できたら愛媛の畜産物は全部、比率は違うかもしれないが全部大事にして欲しいなど。TPP が来たら皆潰れるかもしれないし、いつまで続くか分かりませんが、できる限り続けていきたいと思っておりますので、是非よろしくお願いします。

【知事】

全然無視している訳じゃなくて、物を売る時には、地域ブランドと個別ブランドがあって、地域ブランドの底上げをするためには、トップブランド、注目を集めるものから入って行くことによって関心が高まり、他にもこういう特色をもったものがあるというように全体が底上げされていくという、これはマーケティングを考えた時に、強い地域と弱い地域があり、その時に 2 つの発想がある。強い地域は放って置いて弱い地域を底上げしようというやり方と、強い地域をさらに強くすることで総合力を一気に上げるという 2 つのやり方があるのですが、通常は、効果でいうと後者の方が圧倒的に効果が高い。もちろん弱い地域を無視している訳ではなくて、弱い地域を底上げするための戦略としてやっているのだから、一見すると弱い地域は無視されるように見えるかもしれないがそうではない。例えば、甘とろ豚でも媛っこ地鶏でも、愛媛産という見方をしてくれるので、愛媛産という中で、他にもこういう種類があって、こういう特色があるんだよという情報提供をどうするかということに集中することによって、他の商品ブランドも価値を上げていくということを経営的に考えた方が早いのではないかという気がします。牛もそうですが、今、何もしなかったらこの先どんどん悪くなっていきます。間違いなく。残念ながら今の愛媛のブランドでは全国では通用しないと思います。神戸牛の後追いをいくらやっても、もうこんなに差がついているのでいくら頑張っても追いつけない。今度の牛のテーマは、もっと大きな視点から入っていて、「そもそも消費者志向はどうなのか」という分析から入っている。10年前は、牛肉を選ぶ消費者のポイントはサシの量、いわば霜降りの脂分、とろみ。これこそが消費者が選ぶ一番の要因でした。これが選ぶ時の消費者の 40% くらいがそういう嗜好でした。同じ機関が去年、同じ調査を実施した。10年経って全く変わってきた。サシで選ぶ人は 40% から 6% まで落ちています。その変わり今の消費者は何で選んでいるのかというと赤身とジューシーさ。これは健

康ブームからもたらされたものです。まさに神戸牛の後追いをしても無理だから、この消費者の嗜好こそが、生き残る一つの道ではないかということで、飼育の面からみても味の面からみても、赤身の今の消費者の嗜好にあった肉質を徹底追求する。成功するかどうか分かりませんが、そこを追求して、農家の方に儲かる畜産にさせていただくための種というか情報を提供するのが畜産研究センターの役割だということから始まったプロジェクトです。最低でも3年はかかると思いますが、特に赤身の旨味を出す技術が非常に難しいとされており、先週、愛媛大学にも協力を求めまして、また、これはまだどうするか迷っている所ですが、某食肉超大手の会社も赤身を追求するなら一緒に研究したいというアプローチもあることから、そうした力も借りるなり、単発的に作り出して、今やられている方を追い込むのではなくて、このままではだめになるので次なる道が開けるように頑張っていると受け止めていただきたいと思います。

(参加者)

ニュースソースを見ると愛媛県が甘とろ豚に向いているなあと、一農家としては寂しさを感じた訳です。赤身の牛とおっしゃりますが、レッドビーフというブランドがどんどん出てきている状況なので、若干後手に回っているという感じがある。そこら辺も肉牛の方たちも十分感じている訳ですので、どこを売りにしていくかというのを考えて欲しいなと、一緒にやっていけるものを作って欲しいなと思うところがあります。

【知事】

そうであるならば、申し訳ないんですが、どんどん言わないと。

(参加者)

「ふれ愛・媛ポーク」についても、この10年ずっと愛あるブランドの認定をお願いしますと、お願いし続けて来まして、ずっと断られ続けて来た経過がある。どうして認められないのか私たちには分かりません。今年やっと認定していただいたというので、本当に農家全員で手を上げて喜びましたので、これを機会に支援を、

【知事】

もう一つ説明をさせていただくと、私は、松山市長を10年やってきたが、「ふれ愛・媛ポーク」の宣伝を農業団体から受けたことは一回もないですよ。

(参加者)

テレビコマーシャルと年に1回レイボーフェスティバルというのをやりまして、消費者にもアピールはしているのですが、レイボーフェスティバルでも、甘とろ豚のポスターも貼ったりもしている。確かに全農系はコマーシャルが非常に弱いので、もっと県を見習って欲しいと訴えているところですが、どうしても一般消費者は、ニュースソースであれだけ甘とろ豚をみると、愛媛はみんな甘とろ豚なんだなと、しかし、ちょっと肉(品質)にばらつきがあって、美味しいところに当たった人は、美味しいからまた買おうとなるが、ちょっとはずれると、もう買わないと言う人もいます。そうした消費者の動向も十分に調査をしていただいて、品質の均一化、と場の問題、格付けの問題、そこら辺をクリアしていただきたい。

また、今、本当に豚価が低い。去年から全然上がってこない。今年は上がって良い頃なのに上がらない状況があって、息子が帰って来てやりたいと言うけれども、帰せないよねという農家が、非常に県内に多いです。県の方で何か措置を取って欲しい。できれば、と畜検査料も安くして欲しい。

【知事】

ブランド認定の経緯を知っている人はいませんか。

(南予産業経済部長)

「ふれ愛・媛ポーク」については、詳しくは分からないのですが、開発当初の時点で、県とJAで食い違いがあって、共同作業ができなかったところがあって、県が単独で甘とろ豚をやるよ

うになったと聞いております。

ブランド認定については、ブランドとして認定するためには、ブランドとして確立された条件を設定して、クリアしたものをブランドとし認めていこうという趣旨で県が取組んでいるものですから、そうした面で、趣旨が合わなかったのが、ブランドとして認定されなかったのではないかと思います。生産が安定してきたり、ある程度市場で評価されてきたこともあり、今回ブランドとして認定されたものと思います。ブランド牛については、最初からJAにもご協力いただいておりますし、流通関係の方、生産農家の方にもご理解いただいて、一緒に取組もうというような機運になってきておりますので、そういった意味では、豚の時とはまた様子が少し違うことになっております。連携・共通認識を保ちながら積極的に取組んでいきたいと思っております。

15. 「愛育フィッシュ」について

先程、知事が、養殖魚を「愛育フィッシュ」としたいと言われていたが、今後、どんな展開をするのか教えていただきたい。また、スーパー等では、商品を登録する時に、「養殖」というのを確実に明記しないといけないが、今後、こういった形で「愛育フィッシュ」の知名度を全国に高めていくのか教えて欲しい。

【知事】

まだ、立ち上げたばかりですが、東京で寿司屋に入っていくと何を言われるかと言うと「お客さん今日は良い天然物が入っているよ」とここから来るんです。もうイメージを作られてしまっていて恐ろしいなと思う。食べ物ってイメージでガラッと変わるじゃないですか。例えば、江戸時代は、トロなんか人間は食べていなかったんです。全部えさだったんです。100年経った今、最高級品種になってしまっている。イメージだと思うんですね。このイメージというのはつくづく味わってきた時代があったので、そこがハードルなのかなあという感じがした。今は、一生懸命品質管理して、丁寧に質の良い物を作れるようになったじゃないですか。何でそうなったかという、大昔に、例のホルマリンの問題とかが社会問題になった時の名残が残っているだけです。もう時代が変わってきている。だから、そういう中から考えると、払拭すべき必要があるという判断と、それを一足飛びに持っていくのだったらブランドの命名かなという発想ですね。一応、色んなところに出し始めている。アジアなんかで「愛育フィッシュ」という名前ですと、結構響きが良い。後はどういう戦術を作っていくかで、ある程度の規格を作って、それに対して、県が全部認定して、ステッカーも全部用意して、愛媛産のものについてはそういうステッカーが付いているというところまで持って行って市場に売り込みに行き、そして認知されるころまで行って行きたいと思っております。私自身も、これは積極的に対外的にやりますから、是非皆さんと一緒に、今の養殖は良いものなんだよというイメージを作ること目標にしたいと思っております。それだけのものができてくると思うので、是非一緒にやっていただきたいと思っております。

16. 全国メディアでのアピールについて

宇和島市で「愛育フィッシュ」業をやっている。今年、県の水産試験場とのタイアップで「みかんブリ」というのを作ってみた。それがメディアで取り上げられ、一日だけの放送だったが、凄い反響があった。あまり名刺を配っていなかったが、あちこちから問い合わせがきて、メディアの力は凄いと感じた。鯛は今のところ良いが、カンパチ、ブリ、ヒラメなどがとても安く価格割れで大変なことになっているが、生産者側も手をこまねいている訳にはいけないので、第2弾、第3弾のブランドをどんどん考えている。県の方にもバックアップしていただき、知事には、東国原さんほどではないにしても、全国メディアにどんどんアピールしていただきたいと思う。今後、どういう展開でメディアの方とやっていくのか教えて欲しい。

【知事】

僕は東国原氏みたいなことはできないですが、それぞれ人には持ち味があって、自分の持ち味は、商社でビジネスの最前線に立っていたことがあるということ。ビジネスというのは、どんなものを扱うにしても基本は一緒だと思っています。5段階で考えると言いますが、第一段階は、引き合いという分野で、こういうものがありますよ、ああいうものがありますよ、商品であれサービスであれ、それをどう情報発信し、それに興味のある人とどうマッチングをするかという引き合いですが、これが第一弾。第二段階は契約ですね。マッチングしたらどういう条件で契約しましょうかと単価等を契約する。ここでどうするか。第三段階は、その契約に基づいて物を受け渡す。ここをしっかりとやらないといけませんね、輸送コストであるとか、あるいは鮮度の維持だとか色んな問題に繋がってきますからここを考える。そして第四段階が、実際にお金が入って、やはり商売が成り立ちますから決済ですよ。この引き合い、契約、受け渡し、決済、そして、時に体制として整わないといけないのがクレーム処理です。何かあった時にしっかりした対応が信用に繋がりますから、この5段階が、水産もそうですが、農林業も工業製品もそうですが、皆一緒のことです。それぞれ商品によってそのやり方が違うだけで、水産物の場合も今言ったようなところから考える。例えば先般、上海便の増便にこだわったのは、あそこは宇和島の魚を空輸できるというメリットがあるということ。大きくできる訳ではないですが、空輸ができるということは、宇和島の魚が築地に到着するよりも上海に到着する方が早いということ。その荷の問題があるので増便を随時お願いしたいということで交渉してきたんですが、台湾もすぐ一往復分は増えると思います。これは受け渡しの時点で考えていたことですが、今年はこの先色んな伸びしろが有ると思います。

問題はその引き合いの部分ですね。どう宣伝していくか。私は東国原氏ではないですからそんなやり方はできないが、その代わり先程ちらっと言った県人の力を借りるということ、いよ観光大使に誰を起用するかということですね。その起用した方にどういう役割を果たしていただくか。友近なんかは非常に良いキャラクターだと思う。東国原のパワーの代わりにやってくれるかも知れないというくらい期待をしているんですが、そういったことを考えながら、また、僕一人ではできない分野は、色んな人の力をお借りしながらトータルでプランを練っていきたいと考えております。

17. 宇和島湾内の危険物タンクについて

日頃から危険物の取扱いに携わっている関係で、これから先の地震、津波の影響が非常に気になる。宇和島湾内の海岸線に危険物のタンクがいくつかあり、津波が来ると当然浮いてしまっただけで破壊されることが予想されるが、それに対して、防潮堤など対策として考えていることがあれば教えて欲しい。

【知事】

今回の南海トラフの想定数字というのは、防災に対する考え方を根底から覆すような凄まじいデータになっております。これにすぐ対応できるのかということ、結論から言うと無理です。それには膨大な費用と長期にわたる月日が必要です。県単位でできるようなレベルではない、はるかに越えたレベルの対応策をやっていかなければ、それだけやっても完璧ということはないという気がします。そこで今、実は沿岸部の9県知事が全く同じ気持ちを共有していて、今、連絡会議を作っていますが、ここで議論していることは、これだけ新たな知見が出てきて、しかも、今回の東日本大震災型のプレート縦ずれによる大津波の危険性がこれだけ広範囲に渡って可能性として出てきている以上は、これはもう国策として県境を跨いで取り組む必要があるので、法律の制定が必要ではないかということ。いわば三連動型地震の対応策について、国が進めていくべ

きというのを明記した法律がなければ、これに対する対応策は進まないというような感じがしています。特に防潮堤とか根幹に関わる道路については、国の事業になりますので、こうしたものをスピードアップさせるには優先順位を高めないといけない。優先順位を高めるためには法律が一番早い手段だと思いますので、そういう点は9県知事と連携をしながら進めていきたいと思えます。

今、県の立場でできることは、緊急の命を救うという事業にどう取組むか、それからもう一つは、防災の手前の考え方ですが、減災という災害をできるだけ減らすための工夫というものが、例えば、主要道路に至るまでの入口の櫛の歯の整備だとか、そういうことが県の役目であると思っていますので、大きな防災については、国に対して働きかけを強め、それから減災という考え方と緊急ということについて県が担っていくということを進めていくことが一番遠いようで近道かなと思っています。

【補足】〔県民環境部〕

消防庁では、平成23年12月に取りまとめられた「東日本大震災を踏まえた危険物施設等の地震・津波対策のあり方に係る検討会」の報告を受け、配管や建築物などの耐震性能の再確認や、津波発生を念頭に置いた緊急停止措置対応の予防規程への明記などについて、各地方公共団体に通知しています。

県としては、消防庁の対応を踏まえ、危険物施設等の指導を行う消防機関へ適切な対応を求めると、危険物施設等の安全確保に努めます。

18. 住民一人ひとりが宣伝マンに

ANAから宇和島市に地域づくりマネージャーとして派遣で来ている。色々とお話を伺うと、皆さんみかんは買うものではない貰うものだと思っていたり、本当に美味しいみかんを自分たちで食べているのかなと思う。愛媛県民、宇和島市民の一人一人が宣伝マンになったらもっと変わるのではないかなと思う。行政機関にお願いすることもいっぱい有るかとは思いますが、まず自分達でできることを、知り合いやどこでも良いからもっとアピールする所を作っても良いと思う。私もホテルやレストランに売り込みに行っているが、反応がとても良いので、それをどうやって続けていくか考えている。単に美味しいものを作るだけではなく、食べるタイミングを考えても良いと思う。クリスマスオレンジと言って、カナダでは年末にお世話になった方にみかんを送る風習があるので、「柑橘の本場である愛媛県が年末にみかんを贈り合う」というようなことを提案しながら「コタツでみかん」をもっと違うところでアピールしていけたらと思う。

【知事】

みかん狩りというのは、本当に愛媛県民だと当たり前すぎて関心がないですが、例えば、去年東北の被災地の修学旅行生を招待した時に、現地の学校から一番やりたいことの圧倒的1位がみかん狩りでした。東北は、りんごばかりなので、みかんが新鮮だったことでもあります。全ての学校で非常に好評でした。ぶどう狩りやりんご狩りがビジネスになっているので、みかん狩りも十分そういう可能性があるのかなと思いますが、あまりそういうビジネスではやっていないですね。十分そういう可能性はあると思います。

それから、宣伝マンにというのは本当にその通りで、これは灯台下暗しですが、松山市の市長をやっていた時に、坂の上の雲のまちづくりというのをやりまして、当初は全然だめで「小説なんかまちづくりにしてどないすんねん」って、冷め切って全く受け入れられなかったんですが、今に見ると、県外でこれだけ高い評価を得てるものが地域の人が知らずして、それがどれだけの力を持っているか、絶対何とかしてやるんだというので10年取り組みましたが、最後はドラ

マまで到達したので。そうすると面白いもので殆んどの方が「いやあ、俺には、あの価値は最初から分かっていたよ」という人ばかりになってしまって、本当に時間はかかっています。でもまちの情報発信というのは、おっしゃる通り、その地域に住んでいる人がどれだけ自分達の住んでいるまちの魅力に気付いているのか、受けとめているのか、そして、それを受けとめている人は情報を発信できる力を持っているから、それによって決まるということだけは間違いないと思います。

例えば、ここに一つの会社がありました。そこに勤めている人達はいつも不満を抱きながら向き合っている。しかも、会社の上司がたいしたこと無い、うちの会社のサービスは他所に比べたら全然だめだよというようなことを言う社員の方々に構成されている会社は、絶対に倒産するんです。うちの会社の商品は、こういう特色があってこういう魅力があって、もちろん良いというのが前提ですが、そういう前向きな社員の皆さんで構成される会社は伸びていくんです。だから本当に地域それぞれに、南予には南予の良さがあると思うので。この前、宇和島市のウォークラリーに参加したんですが、今、伊達文化にはまってしまって、面白いのなんのって。なんで宇和島市が語らないのかって思うぐらい、今、のめり込んで調べている最中です。例えば、初代当主の秀宗公の派遣された経緯の謎とか、豊臣家との関係がこうだったとか、派遣されて惨殺された山家清兵衛がどういう立場でいたのか、第5代当主が東京で本家仙台の伊達家のふすまを踏んだことによって骨肉を争う問題が起きたとか、そこに割って入ったのが徳川幕府だったとか、そしてまた8代当主の宗城公なんかは明治に現存した烈傑ですね。もうびっくりしました。宇和島の地にこれだけ時代の先を見て、時の体制に逆らっても先手を打ちながら物事を進めた人がこの地にいたんだなと関心しました。宇和島の人に「宇和島だから知ってるでしょ」と聞くと、「えっそうなの」って、余り知れていないんですよ。まさに坂の上の雲と同じだなと感じたので。それぞれの内部の魅力に、今回のいやし博を通じて良い機会だと思いますので、地域を見つめなおす、その良さというのを認めて皆さんでアピールする力を発揮していただけたら良いかなと思います。

(参加者)

知事がそんなにお詳しいとは感動しました。

【知事】

面白いんですよ。

(参加者)

私も初めて知ったことがいっぱいあったので。ありがとうございます。今後も頑張ります。

19. 「愛育フィッシュ」に愛称を

「愛育フィッシュ」はちょっと言い難いので、皆さんに知られるには愛称があっても良いと思う。私はANAのブログで、「旅達空間」というところに南予の色々な情報、だからお魚がおいしいんだということを書いている。

〈補足〉〔農林水産部〕

「愛育フィッシュ」が愛媛県産養殖魚の愛称ですので、新たな愛称を付けることは考えていないところです。

20. 面白い旅行商品を作りたい

先程の宇和島の鯛めし協同組合の話だが、宇和島の鯛めし協同組合から、松山の鯛めしの方に果たし状みたいな感じで、でも実際はちゃんと相談していて、愛媛の中にも鯛めしは2種類あるんですよという形で、1泊でも日帰りでも良いから2食食べていただいて、アンケートに記入していただいてみたいなことを松山の旅行会社と相談しながら商品化に向けてやっている。愛育フィッシュの話もそうだが、色んな話の場に居させていただき、色んな話を聞かせていただいて、少しずつ噛み砕きながらどんどん面白い旅行商品を作っていきたいと思っている。また、宇和島市の方からも色んな話が下りてきて、一緒に相談させてもらったりしているので、ますます面白い、誰かの歴史にスポットを当てたようなものを作ったり、色んなことができると思う。時間がかかるかもしれないが、観光ガイドも育てていながら色んなことをやっていきたいと思っているのでご協力をお願いします。

【知事】

文化は一つの地域資源ですから。でも、毎日そこに暮していると当たり前になって、気付かなくなってしまうんですね。まちづくりというのは、そういったものを掘り起こして、磨いて、繋ぎ合わせていくというのが一つの基本かなという気がします。すぐに結果なんか出ませんから、地道にやっていくしかないが、本当に継続は力なりで、坂の上の雲の方も最初は本当に大変なスタートでしたが、いつの間にか大化けすることもあるということだと思し、要は素材さえよければ、磨く価値はあると思います。

(参加者)

4月22日のいやし博のオープニングイベントで、本当に知事の挨拶というのが凄くカッコよくて、物凄く感動したので、一言お礼が言いたいと思います。ありがとうございました。

【知事】

あれは住民参加型あいさつと言います。

21. 高知県西南地区との連携について

西南地区との連携について、点と点を結んだストーリー性のあるものとして現実的にやっていけないといけないということで、何年前かに四国ツーリズム創造機構が立ち上がったと思うが、その重点エリアが四国西南地区になっているので、その進行具合というか、県の取組みを教えてください。

あと、メディアの力を利用して、市長時代に坂の上の雲の取組みをされたということだが、大分では、油屋熊八のドラマ化実行委員会が立ち上がっており、それに倣ってというか、メディアを利用して、宇和島にも結構偉人が埋もれているので、その偉人を発掘して、純友なり、宗城さんのドラマ化や映画化のプロジェクトを立ち上げてはどうかという気持ちがある。坂の上の雲は終わったが、その効果があと何年後くらいまで期待できるのか、もし宇和島でこういったプロジェクトをやればどういったものになるのか見通し的なものをお聞かせ願いたい。

【知事】

まず、旅館の関係だと思われるので、ちょっと一言言わせていただきますと、実は南予に行きたいなと、松山市民としてみた場合、何処に泊まって良いか全然分からなかったです。宿泊情報が全くなくて、個人の場合ですよ。ちょっと今度南予に行ってみようか、でも何処に泊まったら良いのか、何処に宿泊所があるんだろうねっていうのが実は今までなんです。これ現実にあったんですね。それがあったので、実は先般、県の方で南予の「御宿帖」というのを作りました。南予の宿泊所全部のデータベースを作ってくれと言って、一発で何処の市にどんな宿泊所があるの

か分かるようなパンフレットと、それから、インターネット上での情報提供の両方をやりました。居るとわからないんですが、外の側からすると情報が全然分からなかったんです。ですから、南予の「御宿帖」。市町ごとに全部こういう宿がありますと料金を含めて連絡先も含めて全部載せましたので、これがあるというのを是非知っておいただきたいなと思います。

坂の上の雲の今後の効果が何処まであるかというのは正直分からないですが、ただ、色んな工夫があって、通常の大河ドラマというのは、一発屋なんです。一年放送ですから、その年にバーンと上がって、翌年にドーンと下がる。坂の上の雲は3年間に跨った放送になっています。年末放送ですからこういう構図(急な山型)はたどってないです。どちらかというところ構図(なだらかな山型)なんです。当時、松山市に来ていた観光客は、年間500万人を切っていたんですが、震災があった年でも580万人、目標は600万人でしたが、588万人まで増えました。今は580万人でキープされているので、しばらくは急降下にはならないだろうなと思っています。ただ、そこから次の仕掛けをしないとだめになるのですが、それは次の市長がプランを考えるテーマになるなと思っています。ただ、残っているものもいっぱいあって坂の上の雲のおかげで関連商品がかなり発売されましたので、特にお菓子関係は非常に好調な売り上げを維持しているところですから、ただ単に観光客だけではなく、そこに従って生まれてくる関連商品のビジネスというのは比較的そこに残っていくんだと思っています。ドラマについては、一発屋の問題もあるので十分気を付けながら進めていくべきだと思いますが、ただ、ドラマになりやすいのは、テーマがあって主人公は女性、もう一つはその女性が職業と絡んで何か要素を持っていたら強いです。これはドラマの題材になりやすい。南予の絡みで言えば、今、坊ちゃん劇場でやっているおイネさんなんかは、これはもう宇和島藩と関係していますから、そこに、伊達家も登場する訳ですよ。村田蔵六とか歴史上の人物も登場しますから、オランダおイネを基軸にして、日本初めての女医さんというテーマは面白いかなという気がします。それから、去年の坊ちゃん劇場でやった誓いのコインというのが、これも面白いテーマで、女性の看護師さんとロシア人の中で芽生えた報われざる恋の物語だったんですが、これはロシア大使を招いて、非常にのめりこみまして、ロシアの青年団もとうとう来て見てくれたんですが、ついに今年の9月にロシア公演が決定するだろうと内定です。国を挙げてバックアップしましょうということになりそうなので思わぬ広がりを見せています。実はこの女性は宇和島市出身です。題材というのは探してみると色々あるんだなと思います。ただ、ドラマ的に考えると今言ったような女性と職業というのは、1つ注目を浴びやすい要素であると思います。

《補足》〔経済労働部〕

四国ツーリズム創造機構では、23年度から、「四国西南部」を重点着地エリアとして、大都市圏を中心にセールス活動を積極的に展開するとともに、24年度には、いやし博の一環として新たに大規模な二次交通・周遊観光バス「ぐるっと宇和海号」の運行開始を支援し、旅行会社に売り込みました。その結果、24年度上期において、28の旅行商品(JTB、日本旅行、近畿日本ツーリスト、ANA セールス、ジャルパックなど)が造成され、170万部のパンフレットが市場に流通しました。さらに来年度も、この「ぐるっと宇和海号」の運行を継続する予定です。

22. 地域イベントへの参加の御願い

松野町の一番良いところは人間だと思っている。お金はないが、皆が知恵を出し汗をかくことに対して、本当に楽しみながらやっていると感じている。大なり小なり多くのイベントを自主財源でやっている。昨年知事には、松野町の一大イベントの桃源郷マラソンに来ていただき大変盛り上がった。貧しくても、明るく元気だよというのが松野町の良いところであって、沿道で応援していたおばあちゃんなんか、中村知事が私に手を振ってくれたわい、寿命が延び

たわいと、それくらい本当に喜んでもらって、私達もスタッフで働いていてとてもうれしかった。様々な問題に対応しなければならない知事の立場で、公私ともにお忙しいとは思いますが、先程宇和島市のウォークラリーにも参加されたと言われていたが、そうした田舎で開催しているイベントには是非とも時間を割いていただきたい。お忙しいと思うが、来年も桃源郷マラソンに参加いただけたらとてもうれしい。

【知事】

去年ハーフマラソンに参加させていただきましたが、本当に参加者が3,000人を超えて年々増えているということは、楽しい雰囲気町民の皆さんによって作られているからこそだと思うし、実際走っていて楽しかった。でも苦しかった。桃源郷なので桃畑を眺めようと思ったが、全くその余裕がなかったけど、疲れた時に梅をいただいたりして、アットホームな雰囲気の中で、終わった後の体育館での閉会のセレモニーもすごく印象に残っています。

実は、松山と言うと大都会に思われがちですが、そういうところだけではなくて、山間部もあれば島嶼部もあります。特に合併した中島町は、人口もどんどん減って、高齢化が進み、合併した時にはもう、ギブアップ寸前、島民の皆さんに、もうこれで中島は終わりやという空気が漂っていた地域でした。そうになってしまうと悪い方ばかり向いてしまうという傾向があって、いくらやってもだめだなあと考えたので、よく週末に島に渡って、地域住民の方と本当にぶつかり合いをしました。島民の皆さんに当時何を言ったかということ、合併したからといって新松山市は、中島に何かすると思って何もしませんよ。行政がまちづくりまでやる、それを待っているのでは何も動きませんよと。その代わり皆さんが可能性を信じて、前向きになってやってみようという空気ができた時は、是非伝えてください。その時は120%応援します。こういうような方針ですよ言ったら、最初はもう「ふざけるな」とかですね、「いやいや本気やで」とがががやりあったんです。そのうち、本当に何もしなかったですから、1年経って中島の人たちが、騙されたと思ってやっただろうやないかということになったんですが、島活性化協議会というのが誕生して、そこから議論を始めて、一体我々の島には何があるのかと、まち歩きから始めたんです。島民の皆さんが手分けして歩きながら、こんなんが眠っていたよとか、それをまたグラフ化して、文化行事にはこんなのがあったので復活させようとか、色んなのが出てきました。これならと思ったので、皆さん島博覧会をやろうと言って、ついに島博覧会の開催が決まったんです。島民の皆さんからすれば、普段中島にあるものだけを提供するだけですから、「市長、こんなんでも来てくれるのかなあ」と言って、「絶対大丈夫や」と言って、何故ならば都会に住んでいる人間は、こういう自然や文化に飢えているんだ、これこそが宝なんだと。それを皆さんが知る機会が絶対来るから、ともかく行こうやと言ってやったんです。島博覧会のオープニングの時に、今でも覚えていますが、アイテムえひめで、午前中から始まったんですが、朝、島民の皆さんに遭ったら、島から魚やなんやか持ってきて「子ども達も呼んで、フナ踊りとかやるんやけど、本当に人来てくれるんやろか」と言って、「来る来る」とちょっと大風呂敷を広げたんですが、結局一日で5万人も来て、3時まで開催の予定だったのが、1時の時点で島から持ってきたものが全部売れちゃったんですよ。そこから島の人たちは自信を取り戻して、やれるじゃんと言って、今でもその時にやったイベントがずっと続いているものがたくさんあります。よく県の職員にも言うんですが、人間と言うのは弱いですから、どちらかということ、何か物に向きあった時に悲観的に入っちゃうじゃないですか。でもそこから生まれるものってたかが知れている。結果はダメかも知れないが、楽観的に入っていくと色んなアイデアが生まれてくるんです。だから、何故できないかを考えるのではなくて、どうすればできるかを考えるというところから入るようにしてくれと、今しきりに言っているんですが、前を向こうが下を向こうが現実是不変変わらないんですから、可能性を信じていくしかないということで今まで走ってきましたが、是非、南予の過疎の問題とか、そ

れは分かりますが、現実是不変なものですから、そこを逆手に取ろうという気持ちの中から何か生まれて来るということを信じませんかということで、やっていきたいなと思います。

23. ハワイアンフェスティバルについて

去年から宇和島で、ハワイアンフェスティバルを始めた。去年は、えひめ丸事故の10年目で、事故を風化させないため、また、ハワイを嫌いにならず、より良い関係になるよう何かイベントをできないかと思い、たまたま私が、フラダンスをしていたので。当初200人くらい来てくれたら良いと思っていたら、協力してくれる方も多くて、1万人近くの方が来てくれて成功した。今年は、いやし博があるので、二日間に分けてやろうと思い、ハワイ関連の方々に片っ端からメールなどで連絡したら、横浜や宮崎、名古屋、岡山など色んなところから出演や出展してくれることになった。今年は、ちょっと大風呂敷で、3万人を目指している。また、フェイスブック等で言っていたら、ハワイアンエアラインさんやサザンオールスターズの関口さんとかがオファーを直接携帯にくれるようになった。来年が13回忌なので、今年のフェスティバルを成功させて、全国の人に知っていただくため、知事にアピールをして欲しい。

【知事】

丁度、去年10年という節目で、就任して直後でしたが、慰霊祭を行うということでハワイに行ってきた。ご遺族の皆さんも一緒でしたが、最初、正直言ってどう振舞ったら良いか凄く悩みました。恐らく、ご遺族の方それぞれに感情が違うと思うのですが、今回行かれた遺族の方々は、そんなに気を使わないでくださいと言われました。10年、色んな思いがあるけれども、それを乗り越えて、慰霊碑もしっかりとハワイの皆さんが守ってくれていますし、それに対する思いもありますので、むしろ前向きに捕らえて、二度とああいうことが起こらないようにすること、それをきっかけに、こっちの気持ちを分かってくれる方も向こうにはたくさんいるので、そこでの友情の絆があると、むしろそういった前向き思考で考えていますから、もうそんなことを言っただけじゃいけないんじゃないかとか、気を遣うのはやめてくださいと、逆に励まされたのがすごく印象に残っています。その結果として、ハワイホノルル市と宇和島市とは姉妹都市になっていますし、ハワイ州と愛媛県も姉妹洲になっていますから、去年行った時にテレビ局の方も一緒でしたが、その時に某テレビ局のもぎたてテレビという番組が、ハワイのホノルルで放映されることが決まりました。より一層、ハワイにおける愛媛県の認知度は上がってくるだろうと思っています。今、交換留学であるとか、野球交流であるとかそういうことも盛んに行っています。特に、フラダンスは、僕も知らなかったんですが、公民館なんかで結構盛んなんですね。松山市はもとより、西条市に行った時にアトラクションがフラダンスでした。地元の方々の女性のフラダンスが披露されて、結構ある程度年齢が行ってもやれるということもあって、敬老会なんかでもおばあちゃん達が結構踊られているんですね。健康や生きがいにも繋がっているということもあるので、その広がりというのが、また宇和島に人を呼び込む一つのコンテンツにもなり得ると思っていますので、是非頑張ってください。

(参加者)

松山の方でも、7月21日にアピールのために大街道でやらさせていただきます。また、来年の13回忌に、是非色んな人に来ていただければと思います。

【知事】

「フラを踊って鯛めし食べよう」とか、そんな感じで行ったらどうかな。

(参加者)

今回も、結構他所から来る方が多いので、ついでに宇和島に泊まっていただくようにアピールをしているところです。全国のハワイアンファンの方が、宇和島のためだったら何かしてあげる

よと言ってくれる方が多いので、観光に来てもらおうかなと思っています。

それと、ちょうど伊達の宗城侯が、丁度ハワイの王様と昔関係があったので、その記念品などが残っているので、その限定展示を博物館に御願ひしてやってもらうようにしております。

24. 知事が出演するラジオ番組について

愛媛に越して来て農業を始めて10年になる。テレビを見る時間も新聞を読む時間もない。夜はふらふらと限界になって、「ああやっと仕事を終えた」の繰り返し。ビニルハウスでラジオをずっとかけていて、知事のことを愛媛のローカルタレントの方かなと思っていた。

今日、皆さんの話を聞いて、深い真剣な話だが、面白いなあと思った。松野もそうだし、宇和島の皆さん面白い人もたくさんいるなあと思った。知事といえばラジオのイメージがあったので、面白い方というか興味がある方を呼んで話をさせていただければ、例えば、松野に来て頑張っているじゃなくて、松野から東京に出て頑張っている人、いやし博のテーマを歌っているライオノートという4人組のグループは松野出身なので、そういう方を含めてとか。特定の個人やグループや会社に県や市町村がそこだけお金を出して応援するのもどうかなと思うことと裏腹ではあるが、是非そういう頑張っている人をこういう場があれば応援して欲しいと思う。

【知事】

ラジオは、ゲストを呼んで僕は聞き役の番組で、12年続けて今もやっていますが、県内で、どんな分野でも良いから、前向きに何かにとことんこだわって目標を持って生きている人をゲストに呼んで、聞き役で話を引っ張り出すというそういう番組です。だから、主はゲストであって、面白い人間がこんなにもたくさんいるのかということを知ってもらった番組の歴史でもありました。スポーツの関係の人もいれば、職人さんもいれば、企業家もいれば、とにかく何かにこだわって、目標がはっきりしていますから、決して諦めないチャレンジ精神を失わないというのが共通項で、ラジオですから声しか聞こえないということで、小さな部屋で二人で話すので、目が輝いているということがとても印象に残る番組で、未だに続けさせてもらっています。どんな人でも、こんな人はどうですかねと局の人に打診して、それは面白いねと言ってくればゲストになるような番組ですから、自薦・他薦を問わず、言っていただけたらと思います。

それと、これは難しいところがあるのですが、丁度先々週だったので、自転車メーカーとタイアップしたイベントでしたが、中には当然のことながら、どうして一つのメーカーをというご意見をいただきましたが、あれには目的があって、台湾のメーカーですが、何故そこを選んだかと言うと、しまなみ海道を世界に情報発信するためには、世界に情報発信できる力を持ったところと組まないとそれは不可能だという判断からです。ということは、世界一のメーカーということに繋がって、しかも、愛媛に縁がないかと調べてみたら、そのメーカーの自転車の素材は、愛媛県の某繊維会社の工場で作られた製品がそこに輸出されて、それが自転車になっているという愛媛との関連が分かったので、これはきっかけができるなというところから判断しましたが、恐らく、今回の体験を踏まえて、既にしまなみ海道を世界に発信するのを勝手にやってくれ始めています。

さっきのプロジェクトの話ですが、愛媛県の南予にも、そういう方々が喜ぶようなコースがいっぱいできますよとアドバイをいただいたので、そういうプロから見たアドバイをいただきながら、市町を巻き込んでコース設定ができれば、その地域の活性化に繋がってくのではないかと思います。確かに、他のところはどうだって良いのかと言うご意見をいただいたのですが、これは、この会社じゃないとできないんです。ということで、何とかうまく軌道にのせたのですが、そういう意味では、成功した人にスポットライトをあてるということなんかは一つの面白いやり方かもしれません。

25. 農業後継者と漁業後継者のコラボレーションについて

青年農業者連絡協議会の中で、農業後継者として活動している。その活動の中で、農業者後継者と漁業後継者とのコラボレーションとして、「みかん鯛」のような何か商品作りに貢献できたらと思っているが、何かできますかね。

【知事】

最初に話した、例えば東予に産業があるという話。みんな縦割りなんです。業種ごと地域ごとに縦割りで、お互いにコラボレーションしたら面白い価値が生まれる可能性があるが、縦割りであるが故に交流がない。というのは、一次産業も同じかもしれませんね。例えば、農業と畜産、或いは水産と。食べるということに関しては共通しているが、意外と組織も完全に分かれているし、団体として後継者として婦人会としてコラボするというの聞いたことがない。地域では有るのかも知れませんが。でも、そこで議論ができれば、何か生まれる可能性が十分あると思います。だって、魚の付け合せには野菜が絶対必要ですし、肉だってそうだし、肉と魚だったらメインディッシュだし、セットということを考えたら面白い取組みができるような気がします。それが全て揃っているのが南予ですから、その一次産業の宝庫ということを活かした、地域にある物の横の連携に基いた取組みというものを若い層が発信して、上の方にはどうしても前例がない、過去にやったことがないので、なかなか取組めない。若手辺りから生まれてくるものだと思いますので、やってみてください。今これをやったら間違いないというアイデアは浮かんでこないですが、ちょっと考えてみます。

《補足》〔農林水産部・南予地方局〕

青年農業者連絡協議会では、優れた経営感覚を身につけるため学習や組織強化のための研修、農業の理解促進のための異業種組織・団体との連携等の活動を行っているところですが、より一層、活動を強化するためには、会員の積極的な発案を具現化していくことが重要と考えます。

お話の農業と漁業のコラボレーションは、これまでの縦割的な活動を幅広くしていこうとするもので、その取組みについては、県の普及機関や市町など関係団体が連携して、業種間の交流が深まるよう、積極的に支援します。

なお、具体的な内容が決まれば、県が実施する「青年農林漁業者やる気サポート事業」において、活動の支援が可能であることから、積極的に活用ください。

また、南予地方局においては、「異分野生産者交流会の開催」や「異分野コラボ商品の開発検討及び試作」などを実施する事業を検討しているところです。